

## 創世記1章1-5節 「創造の初め」

### 1A 神の創造 1-2

### 2A 六日の創造 3-31

#### 1B 光、海、空、陸 1-13

#### 2B 光る物、海空の生き物 14-23

#### 3B 陸の生き物、神のかたち 24-31

### 3A 七日目の安息 1-3

## 本文

「創世記」英語ですと”Genesis”ですが、ヘブル語の聖書はしばしば最初に出てくる言葉がその書物の題名になります。ここでは「初めに」というのが元々のヘブル語の題名です。創世記は、すべての物事の経緯を教えてください。世界の始まり、人類の始まり、結婚の始まり、罪の始まり、殺人の始まり、民族の始まり、などなどです。したがって、私たちが今、何のために生きているのか、どこから来て、どこに至るのか、という問いに対して、明確な解答を与えてくれます。

創世記が書かれたのは、紀元前 1400 年ぐらいの時です。イスラエルを約束の地に率いるために用いられたモーセが、約束の地に自分自身は入れませんが、その前にこれまで主に語られたすべてのことを書き記しました。創世記から申命記までは、それでモーセ五書と呼ばれます。それまで口伝で神から聞いてきたことを、書き記しました。

### 1A 神の創造 1-2

#### 1:1 初めに、神が天と地を創造した。

今、私たちが生きている世界には、この世界の始まりについて二つの考えが存在します。一つは進化論です。進化論によると、今、私たちが見ている形あるものは、何十億年という長い期間をかけて徐々に変化を遂げて出来上がったものであると教えます。つまり、私たちが存在しているのも、偶然の産物だということです。

そしてもう一つは「創造論」です。形あるものが存在するということは、それを造った知的存在がいるからだ、という前提です。人格のある存在が、その知識と知恵によって、目的をもって、秩序をもってこの世界を造られた、という考えです。聖書はもちろん、ここにある記述の通り後者の立場を取っています。

私たちが持っている物を眺めれば、それが何十億年の期間をかけて偶然に出来上がったという理屈と、「いや、これを造った人がいるからでしょ。」という理由とどちらが理にかなっているでしょう

か？例えば、今、このメッセージを録音している IC レコーダーですが、何億年かければ、金属や石油が合成されて、このように形あるものになると考えることができるでしょうか？私は、後者に軍配を挙げたいと思います。そのほうが、あまりにも理屈にかなっていて、受け入れやすいからです。

では、私たちが今見ている自然にあるものはいかがでしょうか？実に美しい自然を私たちが見て、どの美術家でも描くことのできないものがたくさんあります。イエスは、「栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花一つほどにも着飾っていませんでした。(マタイ 6:29)」と言われました。そして私たちの人体を見てください。例えば私たちの目を取り上げて、世界で最も高性能なカメラを持ってしても、私たちの目ほどにきれいに映し出すことのできるものはありません。それほど細微に渡り秩序を持っているものが、何億年の時間をかければ徐々にそうなるのでしょうか？あきらかに、これを造った存在がいると考えたほうがすんなり行くのです。

実は、神がおられるということは、全ての人に明らかにされています。使徒パウロがこう言いました。「というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。なぜなら、神について知りうることは、彼らに明らかであるからです。それは神が明らかにされたのです。神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。というのは、彼らは、神を知っていながら、その神を神としてみがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。(ローマ 1:18-23)」

自然界を見れば、そこに「初めに、神が天と地を創造した。」という神の栄光が表れているのに、それを自分の知性で押しつぶしているのが、知性が暗くなり、そして空しくなっているという結果に陥ります。人間には、目的が必要です。自分の生きている意味が必要です。それがなければ生きられないように造られているのです。神が初めにおられた、という真理のみが、その問いに答えを与えているのです。

ところで、「初めに」という言葉ですが、神が天地を創造されたところから始まりますが、神はその前からおられました。実はもっと前のことを書いている聖書箇所があります。「ヨハネ 1:1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」そして2節に、ことばによってすべてのものが造られた、とあります。このことばは、イエス・キリストのことです。父なる神と、イエス・キリストがすべてのものが造られる前からおられた、ということでもあります。

したがって、先に読んだローマ 1 章にあるように、永遠の方なのです。すべてのもの前に生きておられ、この方が存在していなかったことはないのです。「しかし、主はとこしえに御座に着き、さばきのためにご自身の王座を堅く立てられた。(詩篇 9:7)」したがって、神はご自分で存在するこ

とのできる方です。他ものによって造られたのでもなく、支えられていません。そして、今読みましたように、すべてのものを支配しておられます。この真理を知れば、私たちは心に休みを得ることができます。

そしてここにある「創造した」という言葉のヘブル語は、「バラ」という言葉が使われています。もう一つ「形造った」とか単に「造った」という言葉もあります。形造るのは、すでに存在しているものを集積させて、何か形あるものを造るのですが、「バラ」は無から有を造ることを意味します。私たち人間はすでに存在する原料を使って、何かを造ることはできますが、全く存在しないところから何かを存在せしめることは、神のみにしかできない業です。

1:2 地は形がなく、何もなかった。やみが大きいなる水の上にあり、神の霊は水の上を動いていた。

この箇所は、多くの意見があります。なぜなら、神が創造されたのに、なぜ混沌あるいは茫漠としていて、かつ虚無であったのか？ということです。神は秩序をもって万物を創造されたのではないか、という疑問です。そこでいろいろな答えの試みがありますが、その一つをご紹介しますと思います。

言い忘れましたが、1 節にある「天と地を創造された」というところの「天」は複数形になっています。つまり、天にはいくつかありまして、6 節以降に出てくる空があります。それだけでなく、聖書には「空中」と記されている天があります。それを宇宙であるという人々もいます。さらに、永遠の王座に神が着いておられる天があります。いわゆる「天国」ですね。これをそれぞれ、第一の天、第二の天、そして第三の天と名づけることが多いです。聖書には、「第三の天」のみが記されています。

そこで天において、大きな秩序の乱れがありました。神は天使を天で造られましたが、天使長の一人であるケルブが高慢になったことが書かれています。「エゼキエル 28:12-16 人の子よ。ツロの王について哀歌を唱えて、彼に言え。神である主はこう仰せられる。あなたは全きものの典型であった。知恵に満ち、美の極みであった。あなたは神の園、エデンにいて、あらゆる宝石があなたをおおっていた。赤めのう、トパーズ、ダイヤモンド、緑柱石、しまめのう、碧玉、サファイヤ、トルコ玉、エメラルド。あなたのタンバリンと笛とは金で作られ、これらはあなたが造られた日に整えられていた。わたしはあなたを油そそがれた守護者ケルブとともに、神の聖なる山に置いた。あなたは火の石の間を歩いていた。(ここは、ヘブル語では「あなたは油注がれた守護者ケルブ」となっています。)あなたの行ないは、あなたが造られた日からあなたに不正が見いだされるまでは、完全だった。あなたの商いが繁盛すると、あなたのうちに暴虐が満ち、あなたは罪を犯した。そこで、わたしはあなたを汚れたものとして神の山から追い出し、守護者ケルブが火の石の間からあなたを消えうせさせた。」ツロの王となっていますが、ツロの王の背後に働いていたサタンのことです。

そして、よく知られているのは明けの明星、ルシファーのことです。「イザヤ 14:12-15 暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしてあなたは地に切り倒されたのか。あなたは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』しかし、あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる。」ケルブであり、明けの明星とも呼ばれた天使は、おるべきところから落ちました。そして、興味深いことに、後で「海の巨獣(1:21)」がでてきますが、レビヤタン、竜また蛇によってサタンが現われ、エバの前に出てくるというシナリオです。

したがって、この茫漠とした姿と、虚無の姿はサタンの反逆の結果、起こったのではないかという意見があります。私はどうなのか分からないのですが、けれども、創世記 3 章に出てくる蛇が、神の造られた完全な園エデンに存在しているということは、その前にエゼキエル書とイザヤ書の出来事が起こったことは確かなので、確かにその通りなのかもしれません。

ですから、この世は二つの負の遺産を抱えていることになります。一つは、「形がない」ことです。新改訳の第三版は「茫漠」と訳されています。混沌、カオスとも訳される言葉です。物事に区別がない、秩序がない状態です。神がいなくて心で思っている人々が集まると、そこには無秩序があります。

先に読んだ箇所は、神がいることを否定するので、偶像を拝むようになるとあります。偶像とは、もちろん木や石もそうですが、自分自身が物事を中心であるとする考えです。そこで、次のようなことが起こります。「ローマ 1:26-31 こういうわけで、神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡されました。すなわち、女は自然の用を不自然なものに代え、同じように、男も、女の自然な用を捨てて男どうして情欲に燃え、男が男と恥ずべきことを行なうようになり、こうしてその誤りに対する当然の報いを自分の身に受けているのです。また、彼らが神を知ろうとしたがらないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりました。彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、わきまえない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。」神の秩序である、男と女の結婚が崩され、さらに同性愛が蔓延し、それからあらゆる秩序が壊されている状態です。

さらに、神の創造の行為が始まる前は、虚無があります。生きている意味が分かりません。神の裁きの中には、「永遠に廃墟」というものがあります。何も無くなります、そこは時間が止まったようになっています。ジャッカルのような動物が徘徊することはありますが、命というものを感じることができません。何も無い状態です。しかし、数多くのものであれば、生きている意味が分からない、何も無いという思いは、人が神を認めないところには存在するのです。伝道者の書の始まりは、「空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の

益になろう。(1:2-3)」とあります。

そして、闇があり、大いなる水があるとあります。闇は、悪を象徴しています。ですから、サタンが墮落した後の状態なのではないか、とも言われています。聖書で「闇」が出てくれば、それは悪を行なっている者の姿を表しています。そして水ですが、深い海というのは、すべてのものを吸収し、すべてのものが沈んでいく深い淵の象徴でもあります。聖書は、その奥にハデス、死者の住まう所があり、また罪が葬りさらされるのも海の底であるとあり、そしてレビヤタン、海の巨獣もそこにおり、荒々しい海は、騒々しくする国々の姿としても描かれています。

しかし、希望がそこにあるのです。「**神の霊は水の上を動いていた。**」とあります。興味深いことに、神はヘブル語で「エロヒム」であり、複数形になっています。いや、単複形になっています。「一つの手」と言う時の「一つ」には、五本の指があります。単数の中に複数が一体になっている状態です。同じように神は、三つの人格があるけれども一つであられる方、三位一体の神であります。父なる神、子なるキリスト、そして聖霊なる神です。ここでは、神の霊が動いておられます。

イエス様が、ニコデモにお話しになられたことを思い出せますか？「イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」ニコデモは言った。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎にはいつて生まれることができますでしょうか。」イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。(ヨハネ 3:3-6)」

ここでは「水」は、母親の子宮にある羊水のことを指しているのでしょうか。人が一度、母の胎から生まれ、それから神の霊によって二度目にも生まれて始めて、神の支配されている国に入ることができます。水があり、そこから人は出てきたのですが、依然として闇の中に生きています。しかし、神の霊が働かれると、人は生きることができ、神の国に入ることができるのです。神は、この働きを、実に世界を造られる時にすでに行っておられました。

1:3 そのとき、神が「光よ。あれ。」と仰せられた。すると光ができた。1:4 神はその光をよしと見られた。そして神はこの光とやみとを区別された。1:5 神は、この光を昼と名づけ、このやみを夜と名づけられた。こうして夕があり、朝があった。第一日。

神がことばによって、語られています。ヨハネ 1 章 1 節、「はじめに、ことばがあった。」のことばであられる方がここに現れています。ですから、子なる神、キリストがここにおられます。イエスは地上に再臨される時、「神のことば」と呼ばれます(黙示 19:13)。

光よ、あれと言われると光ができました。この働きがバラです。何も無いところに、有を生み出す

方です。「このことは、彼が信じた神、すなわち死者を生かし、無いものを有るもののようにお呼びになる方の御前で、そうなのです。(ローマ 4:17)」人は物を作ることができますが、それはあくまでも、すでに存在しているものを集めるだけの創造しかできません。何もないところから有を作ることにはできません。人はここで高慢になります。自分で何かをやっていると思っています。しかし、すべては神によって造られ、神によって成り立っており、そして実は、すべてのことは神に至っているのです。

そして、「光」ですが、不思議に四日目に初めて、太陽と月、そして星の姿が出てきます。その前に光があります。よく考えてみれば、月は太陽光の反射ですし、星また太陽も、膨大なエネルギーは作り出していますが、その源がどこにあるかは解明されていません。やはりここでも、神ご自身がその光の源となるエネルギーを与えておられるからこそ、光っているのです。

これは、神の栄光の光であります。太陽を造られる前に、すでに持っておられる光を造られるのです。ともしびがないのに光っているところが、神の幕屋にはありました。至聖所です。そこは、ともしびの光がないのに、契約の箱の上、贖いの蓋の上は光っていました。神ご自身がそこにおられるからです。そして、すべてのものが新しくなった、新天新地において、その都には太陽も月もない、とあります。それは神と小羊イエスの光があるからだと言示録 21 章にあります。ちなみに、新天新地には、海もありません。海は、死とハデスと共に葬り去られたことが言示録 20 章の最後に書いてあります。創世記 1 章の始まりは、言示録の最後 21-22 章と共に読むとよいと思います。神が創造されたところから、人が落ちてしまって、その最低部分にキリストの十字架があり、そして復活によって回復が始まり、最後に完全に回復した姿をみることができるのです。

「神はよしと見られた」とあります。神は祝福しておられます。ご自身が造られたものを喜んでおられます。子供が何か粘土やプラモデルを作って、できあがるのをみてうれしいでしょう、そのような感じです。つまり、神はあなたを喜んでおられるということです。ご自身の造られたものを神は憐れみ、喜んでおられます。

そして、神は光と闇を区別された、とあります。形がなかったところに、形を造られています。区別をされています。神は区別される方です。そして秩序を造られている方です。さらに、神は光を昼、やみを夜と名づけられました。名前を付けることは、支配あるいは管理の能力が必要です。名前を付けることによって、神がそれらを支配していることを示しておられます。

そして、夕があり、朝があったとあります。一日の始まりです。ユダヤ人たちは、この表現をもって夕を一日の始まりと考えます。したがって、日没から新しい日が始まります。彼らの休日は土曜日ですが、実は土曜の日没から活動を開始します。すでに日曜日だからです。

そして、「光」ということに話を戻しますが、闇があって、そこに光がありました。イエス様について、

ヨハネはこう言いました。「光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。(ヨハネ 1:5)」イエスご自身が光であり、そして罪と悪、不法の中にあるのがこの世であり、私たちです。光は聖さを示し、闇はその反対を示しています。ですから、キリストのところに来るとは、光のところに来ることです。そこで悔い改める必要があります。「そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。しかし、真理を行なう者は、光のほうに来る。その行ないが神にあってなされたことが明らかにされるためである。(ヨハネ 3:19-21)」悔い改める者は、光のところに来ることができるのです。

どうでしょうか、光があれと言われた神は、私たちの生活にも光があるように願っておられます。パウロがこう言いました。「光が、やみの中から輝き出よ。」と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。(コリント第二 4:6)」私たちが、闇にいたけれども神の御霊によって新たに生まれ。そして闇にいたけれども、キリストの光の中に入れられることができるのです。